

第二言語としての英語における学習方法別語彙習得の効果分析

異文化コミュニケーションゼミナール

1216002 青木 孝浩

1. 研究動機・研究目的

文部科学省が平成 17 年に全国各地の学校で実施したスクールミーティングにおいては、保護者や教職員から、外で遊ばなくなりテレビやゲームの時間が長いこと、睡眠時間が少ないこと、実体験が少ないことなどの青少年の生活の変化が指摘された。また、我慢できずにすぐにあきらめる傾向があること、主体性がなく受け身であること、学習意欲が低下し基本的な生活習慣が身に付いていないこと、基礎学力、コミュニケーション能力、体力が低下していることなどが、青少年の問題点として挙げられた。現代の青少年は、上昇への志向を持たなくても生活が可能な豊かな社会に生きている。意欲が減退していると懸念される青少年の傾向は、こうした現実への適応能力が高いことの現れとみることも可能かもしれない。しかし一方でそれは、青少年が大人になることへの不安を抱き、変化が激しく不確定な未来から逃避しようとしていることの現れとも考えられる。なお、こうした現状への安住志向といった青少年の傾向は、日本固有の問題ではなく海外先進諸国においても同様の傾向がみられるとの指摘もある。青少年が将来に不安を抱きやすくなる現代で、将来に不安を持たなくなるようにするためには、必要となるスキルを身に付けることで自信を持つことができればその不安は解消されると考えられる。意欲を引き出し、効率的な学習方法の選択が現代で指導者、学習者に求められている。

筆者は、幼い頃から母に音読で物事を覚えさせられていた経験があり、ただ単にひたすら紙に模写することよりも視覚的にとらえたものを声に出すことによって聴覚的にも記憶することができることを感覚的に理解していた。しかし、これは、個人の見解であり汎用性はあるのか疑問であった。そのため、音読と学習効率または記憶することに関して、数値的観点から関連性があるのかを判明させたいと感じた。今回の実験では記憶したことを実際に書き出すことで、音読の有意性を解明した。

本研究の目的は、視覚的情報だけでなく、聴覚情報や触覚情報など五感を増やしていうことで英単語の学習効率に変化があるかを調べた。また、短期的記憶だけでなくテストした方法の中で保持率が高く示さる学習方法の検討も同時に研究した。

2. 研究方法

実験被験者は英語を非母語とする大学生 (18~23 歳) の中で実験結果をはっきりするため TOEFL のスコア 500 点以上を英語学習上級者 (下記より上級者) 13 人と、400 点以下を英語学習初級者 (下記より初級者) 13 人とし、2 つのグループにわけて実験を行った。

本研究では、被験者 26 人において視覚的情報だけでなく、聴覚情報や触覚情報など五感を増やしていうことで英単語の学習効率に変化があるかを調べる。実験は初日：黙読、模写、2 日目：音読、音読と模写とし 10 単語を 15 分の中で覚えてもらい 15 分後にテストを

行う。そして、各学習方法の3日後リテストを行い学習定着率の変化を見る。単語は初級者にも上級者にも知らない難単語を抽出した。

3. 主な結果と考察

今回の実験において、初級者で高い値を示したのは「模写」、上級者で高い値を示したのは「模写と音読の複合」であった。このことは、書くことが記憶に影響に有意なことを示している。一方、低い値に関しても初級者と上級者で学習方法は異なり、初級者では「音読」、上級者では「黙読」が一番低い結果となった。これらは、被験者の英語習熟度によって、適する学習方法が異なることを明らかにされている。

模写の値が黙読や音読の結果よりも高い値を示した理由として、小野瀬(1987)の書くことによって、記憶効率が上がったことと一致している。書き写すとはいえ、一度頭にいった語彙をアウトプットすることは、より理解、定着に拍車をかけるものとなったことが考えられる。これは、初級者・上級者の共通点として挙げられる結果を示している。

初級者の音読の学習方法において点数が下降した理由として、タスクが英訳だったことから、スペルミスが多かった点が考えられる。これより、音読で発音ができたとしても注意力がスペルまで届かなかったことが寄与した可能性がある。また、観察者として、単語の横に読み方をカタカナで表記していたが、初級者はおぼつかない発音であった。それに対し、上級者は発音記号とカタカナ発音からその言葉の発音に近い音を初めから出したりする人が初級者に比べ多かった。

今回の実験ではエビングハウスの忘却曲線の結果とは異なるものとなった。その一因として、エビングハウスの忘却曲線では条件を限定するために無意味綴りの単語を被験者に覚えさせた。今回の実験は被験者に単語として意味があり、日本語として理解が可能な単語を選出している。神谷・伊藤(2000)は、想起された記憶の重要度の高さが、記憶の鮮明度の高さを介して気分に影響するのではなく、重要度そのものが影響を与えるとしている。

4. 結論

本研究の結果から、英語習熟度別の異なる学習方法が語彙の効率的な習得にとって重要であることが示された。特に、本実験では模写することが初級者、上級者に共通して記憶単語数の向上が見られた。

5. 卒業論文の執筆を終えて

研究を進めるにあたりご指導頂きました須藤教授始め、実験協力をして頂いた皆様に、この場をお借りし、感謝を申し上げます。今、このようにあとがきを書くことができるのも、皆様のおかげです。異文化コミュニケーションゼミに入ったことを後悔したことはありません。本当にありがとうございました。